〔論説〕

日本文化と即非の論理

佐伯啓思

（一）

少し個人的な思い出から書き始めたい。昔のことだが、米国政府の招待で一カ月ほど米国内を旅したことがある。その時、先方がガイドをつけてくれた。彼は、戦後すぐに米国へ留学し、そのままかの国に住みつくことになった日本人である。旅の日々、日米比較など、あれこれと話題には事欠かなかったが、何度も彼が口にしていたことがあって、いまだにそれを忘れることができない。

彼は、何度もこういっていた。米国人、いや西洋人は、物事をいつも、〝and〟か〝or〟で考える。しかし、日本人は常に〝and/or〟だ。と。繰り返しこの話をするのだが、本人もその意味を明快には説明できないのである。ともかく、日本人は〝and/or〟だと繰り返すばかりであり、彼の長い米国生活の苦労がこの言葉に詰まっているかのようであった。ついには、「君、そのことをよく考えておいてくれ」といいだす始末である。

そのことがもう三十年以上たっても、奇妙な呪いにでもかけられたかのように、時々頭に浮かんでくる。彼の

いいたいことは何となくわかるのである。かなり大事なことのような気もするのである。しかし、うまく説明できない。こういう状態がずっと続いていた。

〝and〟にせよ〝or〟にせよ、そこには区別される何かがある。〝A and B〟であるか、あるいは〝A or B〟であるか、いずれにせよ、そこには、AとBが識別され、AとBは、いわば同時にありうるか、もしくは共存できないか、である。両者を一緒に合わせるか、もしくはその一方を選択するかである。そこには明瞭な区別がある。

われわれは、通常、西洋人は、基本的に〝or〟の原理で行動していると考える。常に物事の白黒をつける。善悪を区別する。敵か味方かを迫る。「あれか、これか」なのである。常に厳しい選択に迫られている。

これに対して、日本人は、だいたいにおいて〝and〟へ傾く。「和をもって貴しとなす」わけでもなかろうが、物事を区別し対立的に思考することが得意ではない。すべてを一緒に合わせてしまい「あれも、これも」へ向かう、というわけである。どうしても、論述は曖昧となる。

これは一応、分かる話であろう。しかし、彼がいうのはそうではない。西洋人は、〝and〟かあるいは〝or〟なのに対して、日本人は〝and/or〟だ、というのである。日本人は、〝and〟でもあり同時にまた〝or〟でもある、というのだ。AとBが、「AかつB」であり、同時に「AかBか」になっているのが、日本人の思考の特質だということである。

このことを説明するのは難しい。いや、われわれの知る通常の論理では説明不可能である。しかし、その場合の「われわれの知る通常の論理」なるものが、西洋文化のなかで生み出され、生成し発展してきた論理であるとすれば、そもそも、日本人の〝and/or〟を西洋的論理で説明しようとする方が無理なのではなかろうか。いや、論理に西洋も東洋もない。同一律、矛盾律、排中律からなる基本論理は普遍的であって、洋の東西を問うもので

はない、という見解も当然あるだろう。それもまたもっともなことである。ただし、古来、インドにおいては、仏教の四句分別論やそのすべてを否定する中観派の論理など、まったく西洋とは対立する論理構造が考えられてきたが、本論はそこまで深入りするものではない。

本格的な論理学論は別にして、もっと日常的な事態を素朴に考えても、西洋のいわゆる理性的な思考を支える合理的論理が、本当に日本人に納得可能なものかとなると少し話は複雑になる。争いの場においても、AとBは「敵（相容れない）」＝「or原理」なのか、「味方（共存できる）」＝「and原理」なのか、というよりも、「敵ともいえるし味方ともいえる」＝「and/or原理」、というようなことはいくらであるだろう。それを「敵か味方か」に区別し、決定もしくは決断するのが西洋的論理であり、ここで強いて「日本的論理」というならば、それは、「敵とも味方ともいえるし、また敵とも味方ともいえない」といういかにも曖昧模糊たるものとなる。そしてその曖昧模糊とした具体性こそが「現実世界」なのではなかろうか。

それゆえ、このことは、「現実世界」を理解する方法にもそのまま反映されており、西洋文化においては、多分に、この世界を、白黒、善悪、敵味方、その他の多様な二元論的分割とその合成によって構成し、その複雑に入り組んだ二元論の交錯によって世界を表現してきた。この表現は通常はコトバによるもので、その意味では、コトバは、たとえば、〝and〟であるのか、あるいは〝or〟であるのか、明確な指示機能を果たさなければならないのである。

かくて、現実世界はコトバに従って分節され、コトバが生み出す多様な分節によって了解可能な秩序を付与される。現実世界に対して秩序を付与するのは、人間の言語作用であり、それゆえ、人間にとって明瞭な指示機能を発揮するコトバは何よりも重要なのであった。まさしく「ホモ・ロクエンス」なのである。

いいかえれば、世界をコトバによって分節することで、人間は、世界の外部に身をおき、世界を秩序ある体系として認識することができるのであり、それはまた人間が世界を支配することを意味していた。すべてはコトバから始まったのである。コトバが世界をあるべき形として有らしめる。そして西洋において、最初にコトバによって世界を支配したのはいうまでもなく「神（ヤハウェ）」であった。

（二）

ところで、西洋の論理と東洋の論理（ここでは「日本の論理」と呼んでおきたい）の論理の相違を論じて、西田幾多郎は、西洋の論理は「物の論理」であり、東洋（日本）の論理は「心の論理」だと述べた。時によっては、前者を「対象的論理」、後者を「場所的論理」といったりする。西田自身がこの対比を詳述していないので、少し分かりづらい。だが、このいい方からもすでに見て取れるように、彼は、西洋の論理が合理的・普遍的であるとは考えていない。論理もまた、歴史的・文化的な場所に依存しているのである。ギリシャにはギリシャの論理があり、近代西洋のカントにはカントの、ヘーゲルにはヘーゲルの論理があり、それは、彼らが属した時代や文化と不可分なのである。そして、文化を生み出すものは、彼のいい方を借りれば、「歴史的生命の自己形成作用」であり、その自己形成作用の特殊相が、それぞれの文化において論理の形を生む、というのである。

西田は、一九三八年に京都大学で「日本文化の問題」と題する講演を行い、それをもとに一九四〇年に岩波新書で『日本文化の問題』を出版した。大東亜戦争が迫りくる時期である。この書物は、決して分厚くはないが、後期西田の思想が詰め込まれた密度の濃い書物であり、決して分かりやすくはない。そこで、西田は、西洋文化